マサリクとフッサールの思想的交錯
パトチカ論考のパースペクティブ

西角純志

I. 序

「ベルリンの壁」崩壊から10年がたった。中央ヨーロッパには如何なる思想的な変化があるのであろうか。今日ではソ連・東欧社会主義の崩壊をもって「近代の終焉」とする見方が支配的である。「近代」という「大きな物語」が終焉しようとしているなかで、中央ヨーロッパに「小さな物語」がはじまろうとしている。それはひとつの思想の萌芽である。そしてこの物語は、中央ヨーロッパの小さな国として知られるチェコスロヴァキアの建国の父T. G. マサリクの思想の再評価の動きと重なっている。

マサリクは、チェコスロヴァキアの政治家のみならず、哲学者、社会学者として、早くから名声を得ていた。マサリクは、ウィーン大学に学び、フランツ・プレンターノから大きな影響を受け、その後、ライプツィヒにおいて、後の現象学者フッサールとも親交をもった。フッサールは、当時、18歳で、主として数学に関心があり、彼方、マサリクは、当時27歳で、すでに博士号をもっていた。マサリクとフッサールの最初の出会いは定かではないが、1876〜7年当時、ライプツィヒでは、ツィルナーやブントの講義が行われており、2人の出会いは大学のレクチャーホールにはじまるものと思われる。「私は、マサリクと一緒に哲学の講義に参加しましたが、当時それは、私の教養のためばかりではなく、1つの分野としてもありました。マサリクは、ドクターとして当然私より遥かに抜き出ており、未熟な私を助け、物事を理解し自立した考え方へと導道を指し示してくれました」。哲学研究の上でマサリクがいつもフッサールに勤めたのは、初学者として近世哲学に始まり、デカルト、イギリス経験論、ライプニッツから出発することであった。これらは事実、フッサールにとって後々までも権となっていたものである。

マサリクとフッサールは、互いに大学ばかりではなくて、ライプツィヒでの会合「学術哲学協会」でも会った。この会合は、リヒャルト・アベナリウスとカール・ゲーリングの強い影響下にあり、会合のなかでは実証主義的な考え方が支配的な雰囲気であった。フッサールとマサリクは、モラヴィア出身ということで、すぐに仲よくなり、トランジルバニア系ザクセン人の神学学生会にも出入りしていた。この頃マサリクは、フッサールにプレンターノに対する関心を換気させ自分と一緒にウィーンのプレンターノのもとにいくように勧めた。

マサリクはライプツィヒを去る時には、講義台を残し、フッサールはその講義台を譲ってくれるようにマサリクに頼んだ。フッサールはその時、ライプツィヒから出ていたので、マサリクはゲーリングの母親の家にこの小さな家具を残すこととなった。そして、マサリクは、その家具をとりに行くよう手紙を書いたのであった。

1877年8月にはマサリクは、ウィーンに戻り、ギムナジウムで働きながら教授資格論文
マサリクとフッサールの思想的交錯

の研究を続けた。そして2年後には、ウィーン大学の私講師になった。他方、フッサールは、1877年12月頃仏教数学に熱中するようになり、ライプツィヒ大学を退学し、憧れの数学者のいるベルリン行きを決意した。そして1878年から81年の6学期までフッサールは、ベルリン大学で数学と哲学を研究することになった。フッサールのベルリン滞在中にマサリクは4通の手紙を書いた。34 なかでも教授資格申請論文『現代文明の大量現象としての自殺』に関連した問題を扱ったやりとりが興味深い。この本は1881年ウィーンで公刊されたが、それはフッサールが、ウィーンで到着する数日前であったという。

マサリクとフッサールは、ウィーンでは共に親密な個人的接触をとっていた。フッサールは、マサリク邸の常連客であったし、マサリクのもとで『新約聖書』を研究した。1919年9月4日付けのアルノルト・メッツィガーの手紙では、フッサールはマサリクを引き合いに出していないが「ウィーン時代の新約聖書の〈強烈な感銘〉は、ついには厳密な哲学の手助けに、神への道、真の人生を見つける励みになったり」、と語っている。フッサールは、13才の頃の神の存在に関する問題に関心をもっていたが、ウィーンでは、マサリクに従いながら、『新約聖書』の研究に没頭した。そして、1886年4月26日にはウィーンのプロテスタント共同体の洗礼を受けるにいたったのである。当時ドイツでは、プロテスタンティズムへの改宗は、宗教的には幾分あいまいな態度が見られるが、オーストリアでは事情が異なっている。ウィーンのプロテスタントは少数で、この宗教への改宗は決して通常受け入れられている生活様式と単純には適用することはできない。事実マサリクもまた、ウィーンにおいてではないが、カトリックからプロテスタントに改宗している。それは、フッサールより6年早い1880年のことである。マサリクの改宗は、妻シャーロットの影響があってのことであるが、マサリク自身は、硬直した教会の教義ではなく、人間が市民生活を営む上でかけがえのない要素がプロテスタンティズムにはあると考えていたからである。このようにブレンターノの哲学とプロテスタンティズムを共有する両者には如何なる思想的関係があるのだろうか。既にみえてきたようにフッサールは、哲学、宗教の助言ではマサリクに従っており、マサリク自身はフッサールに理性の危機意識を幾分伝えていた可能性があるように思える。

本稿は以上のことを見逐えてマサリクとフッサールに跨る思想的関係を精神的側面を中心にして論及することにしたい。その場合手がかりとなるのがマサリクとフッサールから直接大きな影響を受けた思想学者バトチカの『マサリクとフッサールのヨーロッパの人間性の精神的危機』(1936年) という論考である。35 題名を見てもわかるようにバトチカのこの論考で興味深いのは、立場の全く異なる両者を〈精神的側面〉を中心ににして比較している点である。以下、①両者の精神的危機ないし実証主義批判、②主観主義と客観主義の対置、③そして現代の危機の克服への道程と検討してゆくことにする。

II. マサリクとフッサールの〈精神的〉危機

バトチカは、マサリクとフッサールの思想の共通性を〈精神的危機〉という問題から説き出している。マサリクにとって感じ取ることのできるその危機の形跡ということは、マサリク
の教授資格申請論文『現代文明の社会的大量現象としての自殺』(1881年)のなかにあらわれている。61) この論文は、デュルケムの『自殺論』(1897年)に先立つもので、デュルケムの『自殺論』にも影響を与えたと言われている。マサリクは、その後『現代人と宗教』(1896-8年)、『世界革命』(1925年)、『ロシアとヨーロッパ』(全3巻)、『具体的論理学』(1877年)など多数の著作を残している。

マサリクの考えでは、自殺が劇的に上昇する割合は、単純な事実ではなく従来なものである。19世紀は進歩の時代であった。中世のカトリシズムが与えていた統一的の世界観が新しい科学的な世界観によって揺るがされ、統一的の世界観が失われて行った。科学的な世界観によって人間を精神的、道徳的な価値を喪失し、宗教への信頼も揺らいでいったのである。マサリクは、文明の発展と共に自殺への傾向が生じ、とりわけ、近代以降の自殺は、宗教性の喪失にその原因があると考えている。

マサリクのいうこうした『精神的危機』の従来は、確かに、診断の出発点であるが、マサリク自身は、彼の著作において医学的な類推法を用いて用いている。マサリクによれば、自殺への傾向は、現在の社会状態の構成要素を純粋に客観的に分析することによってではなく、社会的条件と社会的動機において示される全体の内面的な精神的生業状態の分析、例えば、特定の政治的条件、経済的条件の分析によってのみ発見できるという。62) マサリクは、また、コントの歴史哲学の法則を認めている。マサリクの社会学と哲学は、個人と社会についての思想および信仰の現実的影響力の可能性といったものを主に研究対象にしている。コントはマサリクに深い影響を与えたが、こうした影響は、純粋に知的方向を辿っていたのである。

周知のように、コントは、実証的段階への移行の成り行きとして『精神的危機』の風潮を解釈している。マサリクが、伝統的宗教的な観点と新しい宗教的観点の対立として問題を捉えている限り、彼は、コントに同意しているのは明らかである。しかし、マサリクは、コントの宗教の考え方とその哲学と科学への関連を退け、自然科学的な考え方を保持している。また彼自身は、コントがアカールとベーコンから意識的に引き続いて合理主義というものからも距離をおいているのである。こういった合理主義は、実際マサリクとフサール双方にとって問題を含んだものである。

他方、フサールの方もまた、彼の哲学的な活動のはじまりから危機の現象に直面している。63) フサールによれば、19世紀の後半は、近代人の世界観は、もっぱら実証科学によって徹底的に規定され、人間性に対する決定的な意味をもつ問題から無関心に眼をそらすことを意味していた。ルネサンスの高鳴り精神によって満たされ、祝福されていた新しい人間性が、長くもちたえることができなかったのは、みずからの理想とする普遍的哲学と新しい方法の有効性に対する生き生きとした信頼を喪失したということほかなりならないのである。要するに、危機に対するフサールの解答は、根本的な理論の精神から離れてヨーロッパを創建するということなのかである。そしてヨーロッパの精神は、マックス・ウェーバーの指摘を待つまでもなく、あらゆる思想の偉大な合理者になっていたのである。

フサールにとっては、自然科学を模範にした実験心理学の研究方法は、コントの実証主義の基礎となっているまさに客観主義的な形而上学であり、それは、マサリクが学術的な経歴の
はじめて遭遇したものである。マサリクにとって、生活が途絶することは危機の徵候であり、
道徳的統計値を分析することが診断する手段なのである。一方、フッサールは、諸科学の基礎
における明瞭性の欠落のなかに危機を認みてとっている。
「すでに数世紀にわたって心理学を悩ましている問題性—心理学に特有の〈危機〉—こここそが、
数学を含んだ近代科学の解き方が謎を含んだ不明瞭さ、そしてそれに関連して、以前には
思いもよらなかったような種類の世界の謎が生じてきたことに対して中心的な意味をもって
いる。これらすべての謎は、まさしく主観性の謎に帰着し、したがって、心理学の主題設定と
方法との謎に分かちがたく関連している」。こうしてフッサールは、諸科学の危機を「ヨーロッパ
の人間の根本的な生活の危機」、その全実存の危機の表現とみて独自の超越論的現象学を
この危機の克服の手段と考えるのである。
バトチカによれば、フッサールは、「彼の経歴のはじめに遭遇した両義性から離れた、唯一、
ひとつつの根本的な方法があり、それは即ち、主観主義である、ということを確信するようにな
った」のである。両義性から免れた首尾一貫した哲学は、フッサールにとって、首尾一貫し
た主観主義なのである。この点で、フッサールは、〈精神的危機〉のまさに源流のなかに立っ
ているとしたことができる。
「フッサールにとっても、近代の主観主義は、哲学が想定したものであり、現在、困惑して
いる主観的立場から生じたものなのである・主観という近代の発見をどう捉えか、ということ
についての戦いは、ヒュームのような不吉な主観主義から生まれたという事実において、フ
ッサールとマサリク双方にとっては、精神的危機の基礎的な前提である。—実証主義の出発点
は、自然主義的な基礎を用いた主観主義なのである」
デカルトを通してこの細道は、根本的な主観主義へか、あるいはギリシア形而上学に基づく、
有名なキリスト教の神学によって明瞭に表現された傳統的な客観主義の世界観というものへか
の、どちらかに導かれるのである。

Ⅲ．主観主義と客観主義の対置

我々は、マサリクとフッサールが〈精神的危機〉という近代社会の危機意識を共有している
ことを確認してきたが、次に考察されるべき点は、〈主観主義〉と〈客観主義〉をどのように
理解していたかということである。ここに、今一度、近代哲学の主観主義の父デカルトにまで
溯ってみよう。「デカルトの接近方法において、フッサールは、不吉なヒューム的な主観主義
とは何か全く異なったものになっている根本的な主観主義という考え方の前にたじろがないの
である。フッサールは、還元の過程の厳密な適用をすることによって超越論的哲学を復興させ、
超越論的主観性と経験的主観性をはっきり破別し、主観主義の問題を解決している。反対に、
マサリクは、主観主義の実証的な意義の可能性にほとんどまったく気づいていないように思わ
れる。マサリクは、ヒューム的な議論およびカントの先驗的哲学を同時にして批判し、主観と
客観の関係についての二元論、どちらかといえばデカルトの回想録で満足して終わっているの
である。マサリクの〈穏健な理性主義〉とは、魂の教理、唯心論を相ともなっている」。

—52—
マサリク、かく語る。「デカルトは、cogito ergo sum を用いて我々、近代哲学者をすっかり混乱させたのである。デカルトの思考全てに対して、カントはもはや思考の周囲を迂回して戸惑っているのである127」。

パトチカによれば、マサリクにとっての主観—客観関係は、フッサールの文脈における人間関係の主観—客観関係に一致しているかのようにさえ思える。141マサリクは、カントの「純粋理性批判」ないし「実践理性批判」のいずれかにおいてヒュームを克服し得なかったと主張することでカントに対する異議を唱えている。「カントは、神話的啓示から批判的・科学的経験主義へ移行する過渡期の典型的な代表者です。彼は2つの椅子—神学のそれと哲学のそれ—に座っていましたが、まさにその中途半端さによって影響を獲得したのです。彼は、自分の「物自体」という形而上学的トリックによって、極度にナンセンスな主観主義—唯我論—を連れました141」すなわち、カントは、ヒュームの数学の学説をあらゆる知識に拡大していったが、マサリクはカントの基本的な批判の考え方、まさしく主観的に方向づけられた形而上学の考え方というもののに折り合わなかったのである。マサリクにとっては、カントは、まさにに懐疑論者である。

しかしながらマサリクの議論全体が示していることは、マサリクの哲学解釈が、幾分、楽観的で、批判を正面から真剣に受け止めようとはしないということである。マサリク自身は、哲学的カテゴリーをほとんど使用しておらず、マサリクが主張する主観主義では、「客観的世界」を説明することはできないのではないかだろうか。

マサリクにとっての「客観的世界」とは、実際に秩序づけられたものとして現実を深く認識することによって、世界の存在が、純粋で実践的な努力の過程において理解できるというものである。それは、主観性の構造への内部の転換や急激な探求ではなく、反対に我々の主観性にある自己中心的な先入観の自由を打ち破ることであり、自己超越論的な行為においてその世界を善、真理、正義へと前進していくことである。

事実上、マサリクが客観主義について語る時、フッサールが「危機書」において超越論的主観性によって構成された共同の生活世界として結論づけられた生活、意味づけ、そして価値構築といった道徳的に秩序づけられた世界を意味している。しかしながら、フッサールにとっては、生活世界は、超越論的エポークを精密に適用し、超越論的主観的経験に対して現象学的還元によって純粋化された残余からのみ再発見されるのである。コパークによれば、フッサールは、「イデーン1巻」において、「厳密な学としての哲学」の概念を用いた初期フッサール現象学の生きられ現実の直観構造をはっきりと表現しており、実際に感覚的経験の実証主義というより直観的な洞察の実証主義が描写されているように思える。141そしてここにフッサールの「主観性」とマサリクの「客観性」との間の厳密性を読み取ることができる。

フッサールは、専門的な哲学的形態的な言い回しを取り入れている一方、マサリクは通俗的な社会的用語を用いており、主観主義に対して明確な定義はなされていないが、マサリクの場合には、近代人は、自分のつくった理論と関心にのみ閉じ込められ、もはや、生きられた現実はみえないので「主観性は病である」という結論へと導びかれていくのである。マサリクは、真理と客観性のメタファーや転換する一方、フッサールは、主観的な経験において志向性を基
マサリクとフッサールの思想的交流

礎づけることによって客観性に意味を与えようとしたのである。また、「現実の顚末」といった、その他の還元できないものを十分認識することができなくなっていることから、バトチカはフッサールの主観主義的な立場からマサリクの客観主義を批判したのである。

IV. 現代人の危機とその克服への道程

さて、我々は、フッサールとマサリクの〈精神的危機〉の根源が主観主義にあり、それは、カント、ヒュームらの難解な懐疑論に陥ることに原因があることを確認してきた。バトチカによれば、そういった主観主義は宗教性の喪失に繋がるとされている。この点について検討してみよう。

まず、宗教の本質についての彼らの見解をみてみることにしよう。バトチカによれば、フッサールは、この点において、両義的な見解を公表しており、宗教概念については定かではないが、バトチカ自身が述べているようにフッサール自身は信仰の独立した明証性を容認している。17) バトチカによれば、フッサールは、明証性の特殊な性質として、キリスト教が信仰を呼びかけている事実を論理化して成果を見つけて出しているのだとする。キリスト教以前の神々は、元初的に、難なく、論証されることなしに、我々を取り囲んでいる現実の構成要素として現れる。そしてキリスト教徒における信仰の問題は、哲学の発展と影響をともなって可能になったのである。フッサールによれば、宗教の発展は、哲学的な概念それ自体を導くことであり、常にその発展の内に痛烈に感じるものなのである。しかしながらフッサールは、宗教に対する哲学的な動機が、もっとも感性的で概念的には不十分な説明であり、バトチカに言わせれば、フッサールの宗教概念はひとつの「効果的な理想主義」なのである。

フッサールが生涯を通して執着したこの一般的な宗教の概念はウィーン時代にマサリクによって教え込まれたことは間違いない。実際、フッサールはプロテスタントへの改宗にあたり、マサリクの実例に従っている。フッサールにとって「キリスト教の真宵」は、ヨーロッパ文明の最も高い構成物のなかにあった。フッサールにとって、宗教の問題は、少なくとも単独個人に関係しているが、幾分、相互主観性に関係している。

「…相互主観性は、客観的世界を相互主観的に構成する。こうして相互主観性は、先駆的なわれわれとして、その客観的世界に対する主観性であるが、それと同時に、相互主観性は、それが自己自身を客観的に現実化したいの形式である人間世界に対する主観でもある」18)。

フッサールが初期の時代にいわ「神の存在の証明」(1892/93冬)ないしは「有神論と近代科学」(1893/94冬)といった講義を行ったのかは定かではない。しかしながら、我々がフッサールの「デカルト的省察」を読むとき、デカルトがそうであったように、フッサールは、神の概念を合理的に分析し、説明したのではないかといった確信も残る。おそらく、フッサール自身は、宗教概念の説明なしには現象学を発展し得なかったであろう。

他方、マサリクにとっては、宗教は、原始的に信頼を感じとることであり、世界、および職業に愛を投じることなのである。

「我々は、外部の世界および外部の社会に関心を持たなければならない。我々は献身という
ものを学ばなければならない。我々に欠けていることは、本当に偽りのない崇高な愛なのである。もてまた、カルル・チャベックの「マサリクとの対話」の最後の部分で「宗教は、実践的なものであり、深い意味で生活に関わる。宗教は、その教義や儀礼や歴史によっては十分に定義されない。宗教は、その本質を理解することによって定義されるのであり、その本質とは、神性と神に対する人間の依存性の意識である。宗教は、信頼と希望であり、希望は宗教の本質からである。…生全体の意味の理解であるばかりではなく、同時に、その生と世界に由来する気持ちでもある。宗教、敬虔さは、純粋に人間的な事柄であり、神は敬虔ではない。」ある人はまた「私の信仰、それはイエス主義、隣人愛、活動的な愛、神への崇敬です。宗教は希望であり、恐怖に、特に死の恐怖に打ち勝ちます。絶えず高め、ますます高いところへと人を衝き動かし、認識と知恵に対する希望を培い、恐れを知りません。」「宗教は、本質的に権威に基づくものなので客観主義的である。有神論は、極端な宗教の主観主義に対立する。」要するに、「マサリクにとって、宗教は、あらゆるものとの関係において体験している意味的な生活を支えるものなのである。宗教的な客観主義においては、神は全知全能であり、世界の創造者は、我々を気づかしている、というのである。

バトチカによれば、マサリクの宗教概念において、我々は、客観的要素と主観的要素をはっきり区別することが必要なのだという。主観的要素は、信徒の活動を支える宗教的なものであり、客観的な要素は、神と世界の本質についての神学的な考え方である。神は、独立した知能をもった絶対的権力者としてこの世界を大きく超越している。フッサールはマサリクの主観的な要素を受け入れたかもしれないが、神学的客観主義的な考え方を単純に受け入れたとは思われない。フッサールにとっては、絶対者は、むしろ現象学的範囲の対象である。バトチカは、マサリクの忠実な弟子アマニュエル・ラーデルの功績を讃え、これらの構成要素は、マサリクの哲学概念を客観的に結びついているのでなく、マサリクの個性によって保持されていることを指摘する。そして、バトチカは、マサリクの哲学を断じて打ち勝てない「危機の哲学」と名づけている。

「マサリクとフッサールは、深刻で危機の徴候として実証主義者が考えている自然科学的な方法論を実体化することに同意しないばかりでなく、近代の非宗教的なものを近代思想、近代哲学に帰着させることにも、また、危機の状態の徴候としてこうした非宗教的なものと考えられることにも同意しないのである。マサリクは、自殺の傾向で危機の徴候を分析し、またフッサールも、根本的な形而上学の謎を解消によって把握するものとして宗教の概念でこうしたことを確認している。宗教の衰退は、普遍的な意識においては、究極的な使命および哲学的可能性の自覚的衰退ということを伴っているのである。」フッサールとマサリクが、「非宗教的なもの」に同意しない点で、両者の危機の概念の共通点を見出すことができる。

しかしながら、正確には、我々にマサリクの哲学が深刻に提示しているのは、信仰の問題である。バトチカの見るとところ確かにフッサールは、信仰の問題を理解していない。」宗教の信仰は、単なる通俗的な形而上学であるはずがない。絶対的信仰という意味での信仰は、理論的な立場ではなく、むしろ実践的な立場であり、理論から生じたあるいは議論に基づいた個人の決断力の問題ではない。むしろ、信仰はそうした理論ないしは議論に導き、特定の世界観全体
のなかで問題自体を詳細に説明するのである231]

マサリックが繰り返して強調していたことは、プロテスタント信仰は、批判的であらねばならないということである。そして、マサリックのそのような批判的な態度は、偽の神学的観念論から我々自身を解放し、そして、精力的に主観的な立場に信仰の問題をおくことを必要としているのである。今日のフッサールの哲学は、恐らく、そうした答えに基づく根拠としては有用ではあるが、こうした個人的な問題に答えたり、人間存在の問題に正面から取り組むものではないのである。フッサール哲学とマサリック哲学の対立から生じた問題は、根本的な主観主義の文脈における個人の信仰の問題である。さらにこうした問題を処理することなしに、我々は、〈精神的危機〉の問題を解決することができない。またヨーロッパ文化の目的論的考察方式に依存することもできない。むしろ、我々自身、理想的な美徳というものに積極的に理解することに努めが必要であり、理想的な美徳をもって、我々が生活できるということを我々自身確信できるのである。しかしながら、信仰を決断するということは、容易なことではない。意欲的な生活および思索的な生活といった芸術的な表現から引き出せる情熱というものが必要としている。そして我々は、そうした芸術なものへの傾きから生じる情熱をもって、現代の危機を乗り越えることができるのである。

V．結語

以上みてきたようにマサリックにとっての「危機の徴候」とは「自殺の傾向」である。マサリックが分析したものは、「非宗教的なもの」へ陥っていく傾向であった。こうした「非宗教的なもの」は一体何を引き起こすであろうか。こうした傾向は、主観主義から生じた近代の懐疑論に他ならないのである。懐疑論は、客観的世界に到達することの難しさから生じており、それゆえ、哲学は主観主義的な立場へ移行したのである。フッサールにとっても、近代の主観主義は、哲学が想定したものであり、困惑している主観的立場から生じたものなのである。この点で、マサリックはフッサールに一致している。近代の主観主義はそれゆえ〈精神的危機〉の根源なのである。マサリックの「現代人と宗教」とフッサールの「危機論」が、懐疑論に陥っていく様子を描いているのは決して偶然ではない。そして、バートンの哲学は、コパークが指摘しているように、マサリックの客観主義とフッサールの主観主義の弁証法的な統合の形態をとっていると見ることができる232]

しかしながら、マサリックと後期フッサールの現象学には明確な違いがある。マサリックにとっては、意味づけと価値は実際に客観的で、本質的に神に関係がある秩序づけられた世界を意味するものである。マサリックは、しばしば原子の世界(sub specie aeternitatis)といった概念でこれを説明しようとする。それは、唯一偶然に主観と関係がある世界である。フッサールにとっては、意味づけは、本質的に主観に関係がある。フッサールの「生活世界」(Lebenswelt)の概念を彼の思想の中心に移した時、単純に与えられた客観的なものとしてではなく、意味づけとして主観性によって構成された相互主観性(Intersubjectivität)の世界である。フッサールが、強烈に力強く退けた相対主義は、個人的心理学的な主観によって構成されたものとしての世界の考え方なの
であった。心理学主義は、マサリクが、危機の根源として見出した主観主義と明確に類似している。しかしながらマサリクとは異なり、フッサールは、主観性に、客観性ではなく、超越論的主観性を対置させている。そしてパトワカー自身は、出発点としてフッサールの選択を選んだのである。

(1)

マサリクの再評価の動向は一般的に4つの時期(1918年,1945年,1968年,1989年)に分けることができる。最初の動向はオーストリア＝ハンガリー帝国のなかにあるチェコ民族を解放しようとした時である。ナチス・ドイツの占領期間および第2次大戦の間ではチェコは、国家の地位を喪失したが、コミコミストを含んだナチス・ドイツに反対する抵抗運動の指導者たちを一つの関心へと導いていた点で、マサリクは新しい共和国の新たな始まりを求めた価値観を代表していた。

1968年、8月のソビエト軍隊の干渉、全体主義体制の復活の後、マサリクについてはの研究は、主に亡命者の中で行われ、マサリクの著者は地下出版された。マサリクが批判されなければならないほど反対派のなかで、「憲章77」についてや、マサリクや亡命知識人についての議論が起こった。1980年代の中頃にはマサリクの名前は、記念祭、式典においてますます頻繁にみられるようになった。

1989年11月17日はマサリクが幅広く民族意識において復活した時で、マサリク再評価の動向は頂点に達した。それはまた、社会主義の改良のみならず全体主義の社会を完全に廃止して徹底的な政治的経済的民主主義を創立するための運動であった。

拙論「ブルノからの通信」「労働運動研究」第337号1997年参照。

(2)

1936年8月21日にフッサールがフ・ヤンツィークに宛てた手紙。
当時、ヤンツィークは、フッサールの故郷ブロスニッツで、歴史政治科学クラブの書記をしていた。原文は破損しており、手紙のチェコ語翻訳版は、Kulturk 2práya 4(1938)に収められている。また、手紙の一部は、英訳されており、ヤンツィークのサイン入りでフッサール文書館に保存されている。


(3)

K.シューマン編の書簡集には、マサリクフッサールの往復14通の面手紙が所収されている。その内、マサリクからフッサールへは、8通、フッサールからマサリクへは6通。両者の親しい関係が書簡からもよくわかる。


マサリクとフッサールの思想的交錯

4）
Česká mysl 25(1929),str.189.

5）
ヤン・パトチカは、マサリクと並んで20世紀チェコ哲学を代表する思想家のひとりである。
パトチカは、フッサールおよびハイデッガーから大きな影響を受けた。パトチカはソルボンヌ留学中、彼の指導教授でもあったアレキサンダー・コレを介してフッサールと知り合った。それはフッサールが後に「デカルト的省察」になっていく有名なパリ講演を行った1929年2月のことであった。その後、パトチカとフッサールは親しい哲学的友関係が続いた。例えば、フライブルクのフッサールを集中的に訪問したり、フンボルト財団の助成金を得てともに研究しようとしたことなどが書簡からわかる。
K. Schuhmann: E. Husserl Briefwechsel - Die Freiburger Schüler (Dordrecht/Boston/London,

回想録によれば、当時フッサール邸を訪れていたパトチカは、クリスマス・イブにフッサールから特別な贈物をもらったという。それらは、マサリクがライプツィヒを去るとき、哲学に興味をもった若き数学者に残したものであり、フッサールは、この思い出の品を60年近く大切にしているのである。パトチカは「そして、私は伝統の継承者になった」と語っている。
J. Patočka: "Erinnerungen an Husserl" Die Welt des Menschen - die Welt der

後期パトチカは、現在大統領であるハヴェルや、歴史家ハーヴェクとともに「憲章77」の最初の起草者となった。パトチカの代表作としては「哲学的問題としての自然的世界」(1936)、「歴史哲学に関する異端のエッセイ」(1975年)などがある。
パトチカのテキストは、以下のものを使用し、M HKと略記。

また、頁数は、チェコ語、英語、独語の順とする。
J. Patočka: "Masarykovo a Husserlovo pojetí duševní krise evropského lidstva” Kvart.3 (1936).č.2,
str.91-102.
J. Patočka: "Masaryk’s and Husserl’s Conception of the Spiritual Crisis of European Humanity”
Philosophy and Selected Writings translated and edited by E. Kohák (University of Chicago Press,1989),

J. Patočka: "Masaryks und Husserls Auffassung der geistigen Krise der europäischen Menschheit”
Die Bewegung der menschlichen Existenz translated and edited by K. Nellen, J. Němec, I. Šrubář
(Stuttgart, Klett-Cotta, 1991), S.455-469.
6）
T.G.Masaryk: Der Selbstmord als sociale Massenerscheinung der modernen Civilisation
(München/Wien,Philosophia Verlag,1982). 以下：DMCと略記。

7）
Ebend, S. V. V III,231.

8）
E.Husserl:Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie
（細谷恒夫・木田元訳「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学」
中央公論社 1974年16-23頁参照）以下：「危機書」と略記。

9）
Ebenda,S.3.(同書16頁)

10）

11）
ibid.,str.97-8.(p.151,S.464)

12）
ibid.,str.98. (p.152.,S.464-5)

13）
T.G.Masaryk:Modern Man and Religion translated by A.Bibza,Dr.V.Benes
(London,George Allen & Unwin LTD,1938),P.90 以下：MMRと略記。

14）例えば

15）
（K. チャペック「マサリクとの対話—哲人大統領の生涯と思想」
石川達夫訳 成文社 1993年195頁）参照。

16）

17）
J. Patočka : MHK, op.cit., str.95.(p.149.,S.461)

18）
E.Husserl:Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge (Bd.I,Haag,Martinus
Nijhoff,1950),S.137.
（細谷恒夫訳「デカルト的省察」『世界の名著』51所収 中央公論社 1970年 295頁）
マサリクとフッサールの思想的交錯

１９）

２０）
K.Čapek: Hovory s T.G.Masarykem, op.cit.,str.259.（前掲217頁）

２１）
ibid.,str.269.（同書224頁）

２２）
ibid.,str.257.（同書216頁）

２３）
J. Patočka:MHK, op.cit.,str.95. (p.149.,S.460-1)

２４）
ibid., str.101. (p.155.,S.469)

２５）

【参考文献】
E.Kohák: Pan Patočka - Filozofický Životopis (Praha, Nakladatelství a Vydavatelství H&H,1993)
E.Kohák : Pan Patočka Philosophy and Selected Writings
(University of Chicago Press,1989)
L.Nový, J. Gabriel, J.Hroch: Czech philosophy in the 20th Century
J.Zumr, T.Binder : T.G.Masaryk und die Brentano-Schule
(Praha,Filozofický ústav Ceskoslovenské akademie věd,1992)
O.Funda:T.G.Masaryk-Sein philosophisches,religiöses und politisches Denken(Bern,Verlag Peter Lang AG,1978)
T.G.Masaryk: Bibliografie k životu a dílu 1 (Praha, Filozofický ústav ČSAV,1992)
T.G.Masaryk: Bibliografie k životu a dílu 2 (Praha, Filozofický ústav AV ČR,1994)

石川 達夫「マサリクとチェコの精神
－アイディンティティと自律性を求めて」成文社１９９５年
林 忠行「中欧の分裂と統合－マサリクとチェコスロバキア建国」中公新書１９９３年
田島 節夫「フッサール」 講談社学術文庫１９９６年